

## 教員不祥事に対する小学校長の意識調査 — 不祥事防止プログラム構築へ向けた仮説生成の試み —

今井由樹子<sup>1,2)</sup> 佐渡忠洋<sup>3)</sup>

1) 大阪大学大学院人間科学研究科 2) 常葉大学大学院健康科学研究科臨床心理学専攻

3) 常葉大学健康プロデュース学部心身マネジメント学科

## A Survey on the Attitudes of Elementary School Principals toward the Deplorable Behavior of Teachers —An Attempt to Develop a Hypothesis for Building a Preventive Program for Deplorable Behavior of Teachers—

Yukiko IMAI and Tadahiro SADO

### 要 旨

【目的】小学校長がもつ教員の不祥事に対する意識を明らかにする。【方法】公立小学校の校長を対象とした調査を独自に作成したアンケート用紙を使って2014年に実施した。343名の回答結果は記述統計で検討した。【結果と考察】アンケート項目をそれぞれ検討した結果、データより3つの特徴的な意識が抽出された。「不祥事イメージ」とは、小学校校長は教員の不祥事を子どもたちにダメージを与える脅威と考えていることを意味し、「原因の同定」とは、小学校校長は教員の不祥事の原因をその教員の個人的なものに求めやすいことを意味し、そして「対策」とは、小学校校長は教員の不祥事の予防策として職場の人間関係の促進を強調することを意味する。また、不祥事防止プログラムを構築するにあたり、体罰とわいせつ事例に焦点を当てることが有用であると考えられた。【結論】本研究により、不祥事防止プログラムの構築に向けたいくつかの仮説が導き出された。今後の課題は、幅広いデータからさらにこれらの仮説を洗練させることである。

キーワード：不祥事、教員、小学校、校長

### Abstract

OBJECTIVE: To analyze the attitudes of elementary school principals toward the deplorable behavior of teachers. METHODS: Public elementary school principals were surveyed in 2014 using a self-created questionnaire. The responses received from 343 principals were examined via descriptive statistics. RESULTS & RECOMMENDATIONS: An analysis of each item in the questionnaire was conducted and three characteristic attitudes were extracted from the data. The "deplorable behavior image" meant that principals regarded the deplorable behavior of teachers as a threat to their children; the "identification of the cause" meant that principals tried to identify the cause of the deplorable behavior of teachers based on their individual characteristics; and the "countermeasure" meant that principals emphasized the promotion of human relations at the workplace as a preventive measure for the deplorable behavior of teachers. Moreover, it was suggested that starting from the cases of corporal punishment and the obscenity would provide a basis for developing the misconduct preventive program. CONCLUSION: Several hypotheses for the development of the misconduct preventive program were derived. The future challenge is to further refine these hypotheses by examining a wide range of data.

Keywords : deplorable behavior, teacher, elementary school, principals

## 1. はじめに

### 1.1 背景

教員の不祥事は、今日、社会の関心を強く引き寄せている。一般に「不祥事」とは、関係者にとって不都合な事件や事柄を意味するが、文部科学省は「教員の不祥事」の定義を明確に示してはいない。しかし、文部科学省は全国の教育委員会に対して「服務規律の確保」と「非違行為等の抑止」に努め、「国民の信頼の確保と学校教育の充実を図る」よう求めている（文部科学省，2011）。また、公立学校の教員は地方公務員法第33条によって、刑罰法令に触れなくとも、勤務時間内外を問わず、客観的に見て信用を傷つけ不名誉となるような行為を許されない（坂田，2006）。これらのことから、教員の不祥事とは、教員の「非違行為」、「信用失墜行為」、「服務規律違反」を指すと理解でき、そこに犯罪との重なりを見出すことができる。

2013年度に公立教員の中で、懲戒処分または訓告等を受けた者は9,494名であり、全教員の1.03%におよぶ（文部科学省，2015）。その内容の上位3位は、体罰による者が3,953名（42%）、交通事故による者が3,097名（32%）、わいせつ行為等による者は205名（2%）であった。処分を受けた教員数全体も年々増加傾向にあり、わいせつ行為等に関しては1977年度の調査開始以降、初めて年間200名を超過している。これまで、教員の不祥事対策は各教育委員会が種々講じてきてはいるものの、効果は十分とはいえない現状にある。したがって、今後不祥事を防止するためには、不祥事発生のメカニズムを明らかにし、全教職員に浸透する効果的な方策が確立・提供されるべきなのであろう。

教員の不祥事発生のメカニズムについて、坂名城（1999，pp.130-145）は現場の視点から、不祥事の原因を「教育の風土、体質に根ざすもの」、「組織のセクショナリズムと孤立化」、「部活動顧問教師のカリスマ性と人権侵害」、「校長の危機管理能力の低下」、「教師個人のモラルの低下」の5つに求めている。牛丸（2005）は法令等の知識・遵法精神が定着しない学校風土を問題視しており、山上（2011）は社会の混沌・無規制という状況をその原因に挙げている。しかし、中田（2008，p.71）や露口（2007）が指摘しているように、関連報告の多くが教育行政や教員経験者による提言や体験談に留まっており、現状としては不祥事発生のメカニズムを読み解く心理学的研究が十分行われているとはいえない。さらに、教員の不祥事に対して教員自身がどのような意見・見方を有しているかに関する基礎資料も十分ではない。この点に関して社会学からも、「学校事故全体を幅広く見渡すデータ」がほとんど見つからないとの指摘がなされている（内田，2015，p.28）。

## 1.2 目的

そこで本研究は、将来的に教員の不祥事防止プログラムの構築を目指す上での基礎研究として行われた。すなわち、具体的な研究目的は、管理職にある小学校長が、不祥事の原因や影響などについて如何なる意識を有しているかについて調査し、上記のプログラム構築に向けた仮説を得ることである。

## 2. 方法

### 2.1 対象と手続き

調査対象は、2014年5月にA県で開催された公立小学校長研修会の参加者である。対象者らに対して本研究の目的を説明し、協力への同意を得た上で、独自のアンケート用紙（後述）を使って無記名の自己記入方式による調査を行った（配布日同日に回収）。

回答が得られたのは396名（男性243名、女性153名）であった。

### 2.2 アンケートの作成と内容

本研究の目的から、対象者の基本情報に関する4つの設問、不祥事に関する8つの選択設問と3つの自由記述設問、計15の設問からなるアンケート用紙を作成した（付録参照）。作成にあたり、Q.10の性格に関する選択項目についてはYG性格検査の分類法（八木，1987，pp.29-31）を、不祥事に関する設問の選択項目については文部科学省（2011）の報告を参考にした。

### 2.3 分析

396名のアンケート結果のうち、回答に不備があるデータを除いた計343名（平均年齢=55.8±3.49歳、教員歴=32.1±4.11年）を分析対象データとした。内訳は、男性210名（平均年齢=55.7±4.11歳、教員歴=31.3±4.51年）、女性133名（平均年齢=56.0±2.16歳、教員歴=33.4±3.00年）である。

データは各項目の人数と百分率を導き出した後、頻度の高いものに順位を付して記述統計を行った。なお、Q.6～8の設問は、対象者に順番を付けた回答を求めている。そのため、それらの設問に関しては重み付けを与えた形で結果を整理することとし、1位に3点、2位に2点、3位に1点をそれぞれ与え、その合計得点を項目ごとに記した（以下、スコアとする）。

## 3. 結果と考察

### 3.1 身近で発生した不祥事の経験

Q.5とQ.5-2の回答を整理した結果、周囲で不祥事が生じた経験を持つ者は134名（39%）で、その内容としては「体罰」が最も多く、次いで「セクハラ・わいせつ行為」と「交通事故」が同程度の頻度で続いた（表1）。

表1 経験した不祥事案の内訳 (n = 134: 重複あり)

	人数 (%)	順位
① 交通事故	35 (26)	3
② 飲酒運転	10 (7)	5
③ 窃盗	7 (5)	8
④ 不適切な会計処理	9 (7)	6
⑤ 体罰	53 (40)	1
⑥ セクハラ・わいせつ行為	38 (28)	2
⑦ 盗撮	3 (2)	9
⑧ 個人情報漏えい	8 (6)	6
⑨ その他	17 (13)	4

文部科学省は毎年、懲戒処分に関する統計資料を開示している。2009～2013年度で懲戒処分等の対象となった事柄の上位3位には、必ず「体罰」、「交通事故」、「わいせつ行為等」が含まれていた（文部科学省，2010，2011，2012，2013，2015）。したがって、本対象者の身近で発生した不祥事とは、全国的傾向と隔たりがないと理解でき、それは本結果の一般化可能性をいくらか保証するものである。

### 3.2 不祥事が起こす悪影響

Q.6の回答を整理したところ、不祥事によって生じる悪影響としては、「該当校の児童・生徒の精神的打撃」と回答した者が多く、その後に「行為の相手の苦痛・損害」、「学校教育の信頼失墜」、「保護者・地域と学校との関係悪化」の順となった（表2）。

これは不祥事が起きた場合、本対象者らがまずもって、自身の児童・生徒の精神的打撃を懸念することを示している。すなわち、一般に教員による犯罪行為等は学校における危機管理の対象となりうること（渡邊，2008，p12-13）、そして、文部科学省（2007）が「被害者等への心のケア着手」を最優先に位置づけていることに関して、校長ら

の意識は一致しているといえる。不祥事の種類の程度で、管理職は緊急支援チームの派遣要請を行うか否かの判断も求められることから、最初にこの点を懸念することは当然かもしれない。

しかし、こうした管理職の意識に沿った施策がなされているとはいえない。文部科学省は『学校の危機管理マニュアル』（2007）や『学校における子供の心のケア』（2014）の発刊で、不審者侵入や大規模災害への対応方法を現場の教員に伝えている。けれども、教員の不祥事のそれについてはほとんど言及していない。本結果が示唆するように、教員の不祥事発生後に教員が自身の児童・生徒を守る意識を持つならば、それに当たるマニュアルの作成・配布と、さらにそのマニュアルと仮想事例を用いた実践的な研修も必要になるだろう。

### 3.3 悪影響の大きな不祥事案

Q.7の回答を整理し、悪影響の大きな不祥事案としては、「セクハラ・わいせつ行為」が極めて多く、次に「体罰」が続き、さらに「盗撮」と「飲酒運転」が同程度に多いとの結果を得た（表3）。

性的・身体的な暴力が、被害者やその周囲に大きな影響を与えることは想像に難くない。教員のわいせつ行為等の被害者が当該校の児童・生徒である割合は概ね5割であり（文部科学省，2013，2015）、「体罰」の被害者はほとんど当該校の児童・生徒であるとの実情がある。すなわち上記の結果は、対象者らが、まずは教員と児童・生徒間で発生する不祥事を悪影響の大きな事案と考えていることも示唆している。また、「セクハラ・わいせつ行為」と「体罰」が教員－子ども間で生じやすいとすれば、その人間関係のはじまりの多くは校内であろう。したがって、不祥事の種類のみならず、校内で発生する不祥事に対して小学校長は悪影響を見やすいと考えることもできる。

「セクハラ・わいせつ行為」と「体罰」を強く問題視する傾向は専門家においても認められ（藤岡，2008；

表2 不祥事が起こす悪影響について (n = 343)

	悪影響 1 位		悪影響 2 位		悪影響 3 位		スコア化	
	人数 (%)	順位	人数 (%)	順位	人数 (%)	順位	得点	順位
① 行為の相手の苦痛・損害	129 (38)	1	32 (9)	5	24 (7)	6	475	2
② 不祥事の行為者とその家族への影響	15 (4)	6	43 (13)	4	30 (9)	5	161	6
③ 該当校の児童・生徒の精神的打撃	88 (26)	2	120 (35)	1	52 (15)	4	556	1
④ 該当校の教育の滞り	16 (5)	5	29 (8)	6	62 (18)	3	168	5
⑤ 保護者・地域と学校との関係悪化	18 (5)	4	65 (19)	2	94 (27)	1	278	4
⑥ 該当校の職員間との関係悪化	0 (—)		3 (1)	7	9 (3)	7	15	7
⑦ 教育委員会と該当校との関係悪化	0 (—)		0 (—)		1 (0)	8	1	8
⑧ 学校教育の信頼失墜	77 (22)	3	51 (15)	3	70 (20)	2	403	3
⑨ その他	0 (—)	1	0 (—)		1 (0)	8	1	8

表 3 悪影響の大きな不祥事案について (n = 343)

	悪影響 1 位		悪影響 2 位		悪影響 3 位		スコア化	
	人数 (%)	順位	人数 (%)	順位	人数 (%)	順位	得点	順位
① 交通事故	5 ( 1)	7	2 ( 1)	8	4 ( 1)	7	23	8
② 飲酒運転	37 (11)	3	46 (13)	4	80 (23)	1	283	4
③ 窃盗	23 ( 7)	4	25 ( 7)	5	63 (18)	2	182	5
④ 不適切な会計処理	1 ( 0)	8	7 ( 2)	7	7 ( 2)	6	24	7
⑤ 体罰	42 (12)	2	72 (21)	2	63 (18)	2	333	2
⑥ セクハラ・わいせつ行為	198 (58)	1	71 (21)	3	42 (12)	4	778	1
⑦ 盗撮	17 ( 5)	6	99 (29)	1	38 (11)	5	287	3
⑧ 個人情報漏えい	19 ( 6)	5	21 ( 6)	6	46 (13)	3	145	6
⑨ その他	1 ( 0)	8	0 (—)		0 (—)		3	9

表 4 不祥事が起きる原因について (n = 343)

	悪影響 1 位		悪影響 2 位		悪影響 3 位		スコア化	
	人数 (%)	順位	人数 (%)	順位	人数 (%)	順位	得点	順位
① 不祥事行為者の性格の問題	290 (85)	1	20 ( 6)	4	20 ( 6)	4	1274	1
② 不祥事行為者の家庭の問題	3 ( 1)	4	114 (33)	1	64 (19)	3	644	4
③ 仕事上の問題	19 ( 6)	3	99 (29)	3	151 (44)	1	748	3
④ 職場の環境による問題	31 ( 9)	2	110 (32)	2	108 (31)	2	764	2

八尾坂, 2011)、筆者らも被害者との心理面接経験から同様の感触をもつ。このことはある意味で、「セクハラ・わいせつ行為」と「体罰」の悪影響が大だというコンセンサスが既に存在する、と考えることはできないだろうか。つまり、今後の不祥事防止プログラムにおける導入として、この二つの事案への方策から論じていくことが教員に受け入れられやすく、また有効に働く可能性がある。

### 3.4 不祥事が起きる原因

Q.8 の回答を整理した結果、不祥事が起きる原因としては、「不祥事行為者の性格の問題」、つまり、不祥事を生じさせた者の個人的要因に帰する傾向が高かった (表 4)。

ところが、1997～2011 年度にわいせつ行為等による被処分者の 74%は、管理職から処分前に高い評価を得ている (静岡県教育委員会, 2012)。このことは、教員個人の様子から不祥事発生を事前に予測することが困難であることを示している。つまり、管理職が不祥事を個人的要因に帰するというこの傾向は、不祥事にかかわる先入観によるもの、あるいは後付け的に解釈した結果ではないだろうか。このように、適応的な日常生活と逸脱行為という矛盾は、既に犯罪学でも証明されている (大淵, 2006, p.124)。現在では「犯罪を説明するには、個人的特徴、経験、環境特性を特定して、個人的傾向が環境的誘因とどのように相互作用するかについて説明する必要

がある」(Wikstrom, 2006/2013) との考えが広く支持されている。したがって、将来、不祥事防止プログラムの確立と普及においては、個人的性格にのみ原因を求めない教育が必要になるだろう。ある性格が不祥事行為を生むといった静的な理解よりも、その性格が様々な環境的刺激と重なって問題が生じるといった力動的な観点や、そのタイミングで問題が生じていることを問うような布置を読むような観点が重要になると考えられるのである。

### 3.5 不祥事に結び付きやすい個人の要因

Q.9 の回答を整理したところ、不祥事に結び付きやすい個人の要因には、「衝動抑制の不足」と「道徳観・規範意識の低下」との意見が多く、次いで「嗜癖や依存」、「精神疾患」が多かった (表 5)。

犯罪学研究でしばしば引用される Gottfredson & Hirschi (1990, pp.85-120) の理論によれば、「自己統制」は犯罪発生において極めて重要な役割を持つ。また、道徳的意識と規範意識の重要性についても犯罪学では昔から頻繁に指摘されている (例えば、Wikstrom, 2006/2013, pp.106-112 など)。したがって、本結果で示された小学校長の意識は、この点に関していえば、犯罪学の知見と一致している。しかし、そもそも犯罪の発生メカニズムが十分解明されているわけではない。そのため、犯罪学のみならず教員の不祥事に関する研究でも、メカニズム解明にむけた研究が今後より期待される。



表5 不祥事に結び付きやすい個人の要因について  
(n = 343: 重複あり)

	人数 (%)	順位
① 精神疾患	129 (38)	4
② 嗜癖や依存	141 (41)	3
③ 反社会的感情	26 ( 8)	9
④ 共感能力の不足	47 (14)	8
⑤ 過度の不満感	108 (31)	5
⑥ 衝動抑制の不足	225 (66)	1
⑦ 協調性の不足	68 (20)	7
⑧ 道徳観・規範意識の低下	197 (57)	2
⑨ 自己顕示欲や支配性の強さ	71 (21)	6
⑩ 経済的な困窮(負債・浪費など)	3 ( 1)	10
⑪ その他	0 (—)	

表6 不祥事を起こしやすい性格について (n = 343)

	人数 (%)	順位
① 外交的、活動的で 情緒不安定な人	117 (34)	2
② 消極的、内向的で情緒が 安定しておとなしい人	23 ( 7)	4
③ 消極的、非活動的で 情緒不安定な人	170 (50)	1
④ 活動的、積極的で 情緒が安定している人	2 ( 1)	5
⑤ 平凡で特にこれといって 個性が強い人	31 ( 9)	3

表7 不祥事に結び付きやすい仕事上の事柄について  
(n = 343: 重複あり)

	人数 (%)	順位
① 仕事の多忙や重責	121 (35)	5
② 児童・生徒や保護者とのトラブル	151 (44)	4
③ 教職員としての実務能力の不足	161 (47)	3
④ 仕事への慣れや油断	195 (57)	2
⑤ 人間関係の悪化や孤立	267 (78)	1
⑥ 厳しい管理体制や締め付け	44 (13)	6
⑦ 人事に関する不満	15 ( 4)	7
⑧ その他	4 ( 1)	8

一方、選択する者が少なかった「反社会的感情」は規範破りに繋がり、被害者への「共感能力の不足」のために加害行為に及ぶとも言えるだろう。このように Q.9 で取り上げた各項目には関連があると推測できる。そこで、不祥事防止プログラムの構築では、少数意見の項目にも配慮できる理論を中核とする必要がある。

### 3.6 不祥事を起こしやすい性格

Q.10 の回答を整理した結果、不祥事を起こしやすい性格としては、YG 性格検査の E 型 (Eccentric Type) に相当する「消極的、非活動的で情緒不安定な人」を挙げる者が多く、対象者の半数におよんだ (表 6)。

YG 性格検査では、「外向的、活動的で情緒不安定な人」は B 型 (Black-list Type) に相当し、一般的に「反社会的行動に出やす」とされている (辻岡, 1968, p.37)。この知見を本結果にそのまま適用することは慎重を要するが、小学校長の多くが E 型タイプの性格者に不祥事を見やすいことは注目に値する。教員という職業は一般に、積極的で活動的で情緒安定的に児童・生徒へ働きかけることが望まれているが、E 型はそれとは対照的な性格である。今回のように改めて不祥事と性格との関連を問われると、本対象者は不祥事に教員らしくない性格を見て、不祥事を自身とは遠い異質な存在として捉えたのだと思われる。また E 型は、一般的特徴として「とじこもり型だが、自分自身の内面は趣味や教養で充実していることが多い」とされていることから (八木, 1987, p.30)、外面から推し測りにくいものに対する何がしかの先入観によって、対象者は回答したのかもしれない。

### 3.7 不祥事に結び付きやすい仕事上の事柄

Q.11 の結果を整理したところ、不祥事に結び付きやすい仕事上の事柄では、対象者の約 8 割が「人間関係の悪化や孤立」と回答しており、続いて「仕事への慣れや油断」、「教職員としての実務能力の不足」、「児童・生徒や保護者とのトラブル」の順となった (表 7)。

「人間関係の悪化や孤立」と「児童・生徒や保護者とのトラブル」は、対人関係の問題を指していると考えられる。「教職員としての実務能力の不足」も児童・生徒からの不信や職場での孤立へと繋がる要因となろう。他者との親密な結び付きは犯罪発生を抑制する効果を持つが (Hirschi, 1969/1995, pp.29-48)、小学校長も同様の考えを持っているのだと考えられた。この考察は次項の結果と関わってくるため、そこで改めて論じることにする。

次に回答の多かった項目は「仕事への慣れや油断」である。これは、対象者が不祥事を、快楽刺激を求めた結果や、職責の自覚の緩みの結果として理解していることを示す。Wikstrom (2006/2013, p.110) は、習慣的行動が熟考のなさに繋がり、理性的選択や自制心を働かなくさせると述べている。ところが現在、教員の不祥事防止に関する講習会の多くは、危機感を喚起するような形で行われているが、その方策のポジティブな効果に関する報告がないことは、原因としての「仕事への慣れや油断」という考えに再考を求めるものかもしれない。

表 8 不祥事防止のために管理職の働きかけで重要なものについて  
(n = 343 : 重複あり)

	人数 (%)	順位
① 施設管理の徹底・施設の充実化	26 ( 8)	9
② 教職員の実務能力を充実させる指導	167 (49)	5
③ 不祥事防止についての研修	205 (60)	4
④ 職員の人格を高める研修	114 (33)	6
⑤ 職員間の仕事量の偏りの解消	72 (21)	8
⑥ 職員の性格や趣味、家庭状況などの把握	113 (33)	7
⑦ 職場の居心地の良さ	259 (76)	1
⑧ 報告・連絡・相談の徹底	233 (68)	3
⑨ 管理職に対する相談のし易さ	245 (72)	2
⑩ 外部の相談機関の確保	42 (12)	10
⑪ その他	2 ( 1)	11

### 3.8 不祥事防止のために管理職の働きかけで重要なもの

Q.12の結果を整理すると、不祥事防止のために管理職の働きかけで重要なものとして、対象者の約7割が「職場の居心地の良さ」、「管理職に対する相談のし易さ」、「報告・連絡・相談の徹底」を選択していた(表8)。

本結果を前項との関連で考えるならば、小学校長は自身が先頭に立って教員らとの絆を深め、職場環境を調整・改善しようとする積極的な意志を持っていることが分かる。一方で、本対象者は、不祥事の原因を個人の性格に求めるにも関わらず(Q.8の結果より)、「職員の性格や趣味、家庭状況などの把握」を選択した者は少なかった。管理者らは部下個人へ関わっていくことには消極的であり、関わる手段を十分有していないのかもしれない。また、「職員の人格を高める研修」の回答者が少ないのは、各教員の資質向上を図りたくとも、有効だと実感する研修会などが十分に存在しない、と管理者は考えているのではないだろうか。このように管理職の取り組み意識が、環境的要因に向けられやすいという本結果には、管理職の葛藤も見ることができよう。

ところで、教員の児童・生徒へのわいせつ行為の約20%は校内で生じているとの報告があるが(文部科学省, 2015)、本設問で「施設管理の徹底・施設の充実化」と回答した者は少なかった。Kahn (2001/2009, pp.105-119)は加害者が被害者に辿り着くまでには4つの壁があり、その第3の壁「外的バリア」(環境や機会)は犯罪発生を抑止する重要なものだとしている。したがって、小学校長はあまり目を向けてはいないが、犯罪発生の機会を失することを目的とした施設管理・整備は、効果が期待できる防止策であろう。

### 3.9 得られた結果の整理

以上、小学校長が不祥事に対して如何なる意識を持っているかを検討してきた。これまで整理し考察してきた結果は、「不祥事イメージ」、「発生原因の同定」、「対策」

という三点にまとめることができる。

まず「不祥事イメージ」に関して、本対象者らは、不祥事が発生した後、児童・生徒への精神的被害という悪影響を最も懸念している。不祥事の内容については、とりわけ児童・生徒が直接の被害者になる可能性が高い性的な事案と暴力的な事案を強烈なイベントと考えている。また、その発生の端が学校という場にあることに敏感に反応している。加えて、不祥事発生後のマニュアルや手引きが存在しないことは、小学校長が、素早く児童・生徒の精神的ケアに着手する具体的手段を持たないということであり、不安を感じさせる一因であると考えられた。

教員は、子どもを守れなかった罪責感、不祥事を起こした教員への怒り、同じ教員としての恥辱感や同じような目で見られるのではないかという猜疑心などを経験するのだろう。職業特性として負の感情の抑圧を求められやすい教員にとって、とりわけ性的・暴力的な出来事は自身のコンプレックスを賦活するものかもしれない。これらのことから、小学校長は不祥事に対して、児童・生徒・教員に強いダメージを与える脅威というイメージをもっていると考えられた。

第二に、「発生原因の同定」であるが、対象者らは、不祥事を個人の問題として、とりわけ不祥事を起こした人の性格に原因を見だしやすい。また、衝動性や道徳観・規範意識が不祥事に結び付くと考え傾向がある。

回答方法の影響も考慮せねばならないが、不祥事を衝動性や道徳観・規範意識との関連で捉えることには、原因の同定に明確な偏りがあることを意味している。先ほどのコンプレックス論を踏まえるならば、不祥事によって生じた動揺を回復させるために、教員は集合的意識や大衆の考えに拠り所を求めるのであろう。教員が多様な危険要因に気づき、なおかつ環境との相互作用や複合的な要因までも考慮できるように学習機会を設ける必要があるだろう。

第三の「対策」としては、対象者らは職場の人間関係を重視して、環境的要因に働きかける意識をもっている一方で、個人の仕事量、趣味や家庭状況の把握、人格や職務能力といったものへの直接的な働きかけについては消極的である。

教員のメンタルヘルス対策に関するある報告によると(社団法人東京都教職員互助会・ウェルリンク株式会社, 2008, pp.9-17)、仕事・職業生活に強い不安やストレスを感じたことがあると答えた教員は68%であった。そして、仕事や職業生活で困ったときに相談できる上司や同僚がいると答えた教員は、わずか14%であった。このように、職場内に相談相手が少ないとの実情からして、小学校長が環境要因に働きかけ、それが効果を発揮するならば、不祥事の発生抑制にも一定の効果が期待できよう。ただし、校長は教員の個人的な事柄へ介入することに躊躇しやすいため、管理職を含めた教員の関係性向上や人格の成長を目指す研修を考えていく必要がある。

### 3.10 不祥事防止プログラムに向けて

不祥事防止プログラムを構築したとしても、それを実践するのは教員である。そのため、そのプログラムは組織にも個人にも受け入れやすく、汎用性が高く、また具体的なものが理想であろう。そこで、教員自身が最も危機意識を感じている校内で生じる不祥事と、児童・生徒が直接の被害者となりうる体罰およびいじめに焦点を当てることがよいだろう。

犯罪学では、個人の犯罪・非行を促進する要因を危険因子、犯罪・非行を踏みとどまらせる要因を保護因子と呼ぶ（渡邊，2007，p.126）。教員の不祥事防止プログラムにおいても、危険因子の軽減と保護因子の強化をねらうリスク・マネジメントが重要になるだろう。そのため、本結果にも十分対応し得る Andrews & Bonta（2010）の理論を、今後開発するプログラムの中核に据えることが妥当ではないだろうか。この理論は一般犯罪の危険因子をすでに抽出しているだけでなく、効果的な防止策としてリスクの軽重に着目して可変的な危険因子を標的とし、クライアントと治療アプローチのマッチングを重視するからである。

さらに、教員が自分の影（教員らしくない自分）やコンプレックスについて自己理解を深めるといった心の仕事をするのが保護因子になると期待できる。この点も考慮するのであれば、犯罪学や犯罪心理学のみならず、臨床心理学や「現象のなかに自分がはいること」を前提とする臨床教育学（河合，1995，p.8）を踏まえたプログラムが望ましいのではないだろうか。

## 4. おわりに

教員の不祥事について報道がなされると、関係者は衝撃を受け、学校は混乱し、児童・生徒は動揺する。しかし、教員の不祥事に関する研究はこれまで十分に行われてこなかった。今回の調査は、数量的な結果から教員の「不祥事イメージ」と「原因の同定」と「対策」についての意識を明らかにした。そして、将来の不祥事防止プログラム構築に向けた仮説を得ることに成功した。今後は、不祥事を起こした教員の心理学的研究、不祥事発生後の介入事例による質的研究などによって基礎知見を集積しつつ、プログラム構築へ向けた具体的な研究段階に進む予定である。

なお、意識調査に関しては中学校や高等学校との比較、管理職以外を対象とした調査も仮説を洗練させる上で求められる。今後の課題としたい。

## 文 献

Andrews D. A. & Bonta, J. *The Psychology of Criminal Conduct*, 5ed. NJ: Anderson publishing. 2010  
藤岡淳子「対人関係における暴力とは」藤岡淳子編著

『関係性における暴力——その理解と回復への手立て』岩崎学術出版社、2008年、2-13頁

Gottfredson, M. R. & Hirschi, T. *A General Theory of Crime*. Stanford. CA: Stanford University Press. 1990

坂名城英介『教師の不祥事は防げるか——教師のための不祥事防止マニュアル』那覇出版社、1998年

Hirschi, T. *Causes of Delinquency*. Berkeley: University of California Press. 1969 森田洋司・清水新二（監訳）『非行の原因——家庭・学校・社会へのつながりをもとめて』文化書房博文社、1995年

Kahn, T. J. *Pathways: A Guided Workbook for Youth Beginning Treatment*, 3ed. VT: Safer Society Press. 2001 藤岡淳子（監訳）『回復への道のり…パスウェイズ——性問題行動のある思春期少年少女のために』誠信書房、2009年

河合隼雄『臨床教育学入門』岩波書店、1995年

文部科学省「学校の危機管理マニュアル——子どもを犯罪から守るために」2007年 [2015年9月1日閲覧]

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/anzen/1289310.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1289310.htm)

文部科学省「平成21年度教育職員に係る懲戒処分等の状況について」2010年 [2015年9月1日閲覧]

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/jinji/1300256.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1300256.htm)

文部科学省「平成22年度教育職員に係る懲戒処分等の状況、服務規律の確保及び教育職員のメンタルヘルスの保持等について」2011年 [2015年9月1日閲覧]

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/088/shiryo/attach/1316712.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/088/shiryo/attach/1316712.htm)

文部科学省「平成23年度公立学校教職員の人事行政状況調査について」2012年 [2015年9月1日閲覧]

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/jinji/1329089.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1329089.htm)

文部科学省「平成24年度公立学校教職員の人事行政状況調査について」2013年 [2015年9月1日閲覧]

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/jinji/1342555.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1342555.htm)

文部科学省「学校における子供の心のケアサインを見逃さないために」2014年 [2015年9月1日閲覧]

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/hoken/\\_icsFiles/fieldfile/2014/05/23/1347830\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/fieldfile/2014/05/23/1347830_01.pdf)

文部科学省「平成25年度公立学校教職員の人事行政状況調査について」2015年 [2015年9月1日閲覧]

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/jinji/1354719.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1354719.htm)

中田正浩『教育現場に求められることと品格 [指導事例集] ——事件から見た教職員の不祥事防止』大阪教育出版、2008年

大淵憲一『犯罪心理学——犯罪の原因をどこに求めるか』

- 培風館、2006 年
- 露口健司「学校組織における信頼構築のためのリスクマネジメント——リスク処理の局面を中心に」『教育経営学研究紀要』10 巻、17-35 頁、2007 年
- 坂田仰「教員の不祥事と懲戒処分——変化する社会の視線（事務職員のためのリーガルマインド）」『学校事務』57 巻 9 号、60-64 頁、2006 年
- 社団法人東京都教職員互助会・ウェルリンク株式会社「文部科学省委託「新教育システム開発プログラム」教員のメンタルヘルス対策および効果測定〔調査結果報告書〕」2008 年
- 静岡県教育委員会「不祥事根絶に向けて（報告）」2012 年  
[2015 年 9 月 1 日閲覧]  
[https://www2.pref.shizuoka.jp/all/file\\_download/2100.nsf/pages/DF0BB43D491A1C6D492579BC0018CF](https://www2.pref.shizuoka.jp/all/file_download/2100.nsf/pages/DF0BB43D491A1C6D492579BC0018CF)
- 辻岡美延『新性格検査法 YG 性格検査実施応用研究手引』竹井機器工業株式会社、1968 年
- 内田良『教育という病——子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』光文社出版、2015 年
- 牛丸宗尚「教員不祥事と遵法精神の欠如—公立学校の七不思議⑧（ミニ講座事務長キャリアアップ講座）」『学校事務』、56 巻 11 号、68-71 頁、2005 年
- 渡邊和美『エビデンスに基づく評価と介入、犯罪・非行の心理学』2007 年
- 渡邊正樹「学校における危機管理の課題」渡邊正樹（編著）『新編学校の危機管理読本』教育開発研究所、2008 年、11-13 頁
- Wikstrom, P.-O. H. Individuals, Settings, and Acts of Crime: Situational Mechanisms and the Explanation of Crime. In; P.-O. H. Wikstrom & R. J. Sampson (eds) *The Explanation of Crime: Context, Mechanisms and Development*. Cambridge: Cambridge University Press. 2006 松浦直己（訳）「犯罪学研究——社会学・心理学・遺伝学からのアプローチ」『犯罪学研究』明石書店、2013 年、74-122 頁
- 八木俊夫『YG 性格検査——YG テストの実務応用的診断法』日本心理技術研究所、1987 年
- 山上賢一「教師の不祥事を防止するための一考察」『人間学研究』10 巻、89-95 頁、2011
- 八尾坂修「教職員の不祥事への対応」『教職研修』39 巻 6 号、30-33 頁、2011 年



付録  
本研究で使⽤したアンケート⽤紙の項⽬説明

- Q. 1 あなたの性別は？ [選択：①男、②女]
- Q. 2 あなたの年齢は？ [ 歳（数字で記入）]
- Q. 3 あなたの教員歴は？ [ 年（数字で記入）]
- Q. 4 あなたの役職、立場は？（例：中学校校長、小学校〇〇主任など）[自由記述]
- Q. 5 同じ職場の同僚や親しい教職員が、なんらかの不祥事で処分を受けたということを、あなたは経験したことがありますか？ [選択：①ある、②ない]
- Q. 5-2 上の質問で「ある」と回答した方にお訊きします。経験した事案は次のうちどれに該当しますか？（複数回答可） [選択：①交通事故、②飲酒運転、③窃盗、④不適切な会計処理、⑤体罰、⑥セクハラ・わいせつ行為、⑦盗撮、⑧個人情報漏えい、⑨その他（ ）]
- Q. 6 あなたは、不祥事による悪影響とは次のうちどれだと思いますか？ 最も強い悪影響だと思う順番に3つ並べてください（数字で記入）。 [選択：①行為の相手の苦痛・損害、②不祥事の行為者とその家族への影響、③該当校の児童・生徒の精神的打撃、④該当校の教育の滞り、⑤保護者・地域と学校との関係悪化、⑥該当校の職員間の関係悪化、⑦教育委員会と該当校との関係悪化、⑧学校教育の信頼失墜、⑨その他（ ）]
- Q. 7 あなたは、悪影響の大きい不祥事事案は次のうちどれだと思いますか？ 悪影響が最も大きいと思う行為を3つ順番に並べてください（数字で記入）。 [選択：①交通事故、②飲酒運転、③窃盗、④不適切な会計処理、⑤体罰、⑥セクハラ・わいせつ行為、⑦盗撮、⑧個人情報漏えい、⑨その他（ ）]
- Q. 8 あなたは、不祥事が起きる原因は、どのようなことだと思いますか？ 次の①から④を、大きいと思う順に並べてください（数字で記入）。 [選択：①不祥事行為者の性格の問題、②不祥事行為者の家庭の問題、③仕事上の問題、④職場の環境による問題]
- Q. 9 あなたは、不祥事に結び付きやすい個人の要因は、次のどれだと思いますか？ 3つ以内で選択してください。 [選択：①精神疾患、②嗜癖や依存、③反社会的感情、④共感能力の不足、⑤過度の不満感、⑥衝動抑制の不足、⑦協調性の不足、⑧道徳観・規範意識の低下、⑨自己顕示欲や支配性の強さ、⑩経済的な困窮（負債・浪費など）、⑪その他（ ）]
- Q. 10 あなたは、最も不祥事を起こしやすいのは、次の性格のうちどれだと思いますか？ 1つ選んでください。 [選択：①外交的、活動的で情緒不安定な人、②消極的、内向的で情緒が安定しておとなしい人、③消極的、非活動的で情緒不安定な人、④活動的、積極的で情緒が安定している人、⑤平凡で特にこれといって個性が強い人]
- Q. 11 あなたは、不祥事に結び付きやすい仕事上の事柄は、次のどれだと思いますか？ 3つ以内で選んでください。 [選択：①仕事の多忙や重責、②児童・生徒や保護者とのトラブル、③教職員としての実務能力の不足、④仕事への慣れや油断、⑤人間関係の悪化や孤立、⑥厳しい管理体制や締め付け、⑦人事に関する不満、⑧その他（ ）]
- Q. 12 あなたは、不祥事を防止するための管理職の働きかけとして重要なものは、次のうちどれだと思いますか？ 5つ以内で選んでください。 [選択：①施設管理の徹底・施設の充実化、②教職員の実務能力を充実させる指導、③不祥事防止についての研修、④職員の人格を高める研修、⑤職員間の仕事量の偏りの解消、⑥職員の性格や趣味、家庭状況などの把握、⑦職場の居心地の良さ、⑧報告・連絡・相談の徹底、⑨管理職に対する相談のし易さ、⑩外部の相談機関の確保、⑪その他（ ）]
- Q. 13 不祥事発生の危機感を感じるはどのような時ですか？ 自由に記述してください。[自由記述]
- Q. 14 不祥事発生が増加した原因は何だと思いますか？自由に記述してください。[自由記述]
- Q. 15 その他、不祥事防止についてご意見があれば、自由に記述してください。[自由記述]

※ 設問文章はゴシック体で、回答方法は [ ] で示した。